大学は新入生にどんなメッセージを伝えればよいのか？
私が『学びのティップス　大学で鍛える思考法』を書いた理由

近田　政博
（名古屋大学　高等教育研究センター　准教授）

新入生に最初に伝えるべきことは履修手続きの方法か？

大学は新入生に対して、どんなメッセージを伝えればよいのだろうか？　ほとんどの新入生は偏差値や入試科目というフィルターを通して大学を見ている。どこの大学のどの学部がどのくらいの偏差値なのかは実によく知っている一方で、肝心の大学の中身については、オープンキャンパスで紹介された表面的なこと程度しか知らない。新入生は自分が入学する大学についてかなりいびつな先入観に支配されているので、大学人はこのイメージを崩しつつ、大学がどういうものであるかを新入生に語りかけなければならない。いわば大学イメージの「脱構築」が必要なのである。このため、どこの大学でも新入生に対してはさまざまなオリエンテーションやガイダンスを実施している。しかして、その実態はどうか。

よその大学を批評するのは差し障りがあるので、自分の大学の事例を紹介しよう。東海地方にある国立N大学の場合、新入生に対しては四月早々に「学生生活ガイダンス」なるものを実施している。そこでは、課外活動、奨学援助、事務室で必要とされる諸手続、学内交通ルール、廃棄物、海外留学と国際交流、情報ネットワーク利用、自然災害対

策、セクシャルハラスメント、学生相談、附属図書館の利用などについて紹介される。新入生は地元自動車メーカーの寄附によって設立・改修された巨大な講堂に集められ、次から次へと関係諸機関の担当者（職員の場合もあれば、教員の場合もある）が出てきて、延べ三時間余にわたる説明をブロイラーのように一方的に注入されるのである。純朴な新入生は、最初のうちは真面目に聞いているが、そのあまりの情報量に意識が混濁し、やがて睡魔に耐えられなくなる者が続出する。それでも懲りずに各担当者は機械的に説明を続け、儀式は粛々と滞りなく進むのである。その全体像を把握しているのは司会進行役の課長補佐ただ一人であり、ほとんどの教職員はここで何が行われているかを知らない。私自身も毎年五分間を頂戴してここで説明する教員の一人として、新入生諸君に対する憐憫の情および若干の罪の意識を禁じ得ないのである。

このガイダンスから新入生はどのような「ヒドゥン・メッセージ」（隠れた意味）を読み取るであろうか。曰く、大学ではつまらない話をひたすらに我慢して聞く忍耐力が求められている。曰く、大学では出席することが大事なのであって、眠ろうがよそごとを考えていようが構わない。曰く、大学で最も重要なのは手続きである。各種申請書や証明書の申請方法を正確に理解することが何よりも重要である。

新入生はこうした洗礼を浴びた後、さらに各学部別に行われる履修ガイダンスを受け、複雑怪奇なカリキュラムと履修登録手続きに戸惑いつつも、上級生のピアサポーターたちの助けを借りながら、なんとか手続きを完了する。こうして晴れて授業の日を迎えるのである。わがN大学では新入生全員必修の「基礎セミナー」という看板授業があり、ここでは大学で必要とされる「読み、書き、話す」基礎スキルを習得することになっている。この授業を担当する教員は毎年二〇〇人を超えるが、教員は自分の専門分野からアプローチするので、素粒子理論から甲骨文字の読み方まで百花繚乱である。その多彩性はまことに大学らしくてけっこうなのだが、一方ではどんな素材をどう扱おうが自由なので、二〇〇人余の教員が実際にどのような授業を行っているのか、知る手がかりは履修選択用のシラバスしかない（その内容はオンラインで公開されている）。授業評価アンケートによれば、基礎セミナーの満足度は他の科目と比較するとかなり高いのだが、だからこそ期待を裏切られたときの失意はいっそう大きくなるかもしれない。

私が何を言いたいのかというと、新入生にとって「大学

とはどういうところか」「大学で学ぶことにどんな意味があるのか」「それは高校時代までとは何が異なるのか」「実際にどのようにして学んだらよいのか」などについて知る上で、形式上は学内にサポートする仕組みがいろいろな存在しているのだが、実際には手続き論ばかりで、誰も本質的なことを伝えていないのではないかということである。そんなことはないと否定するなら、「レポートを書けと言われても、どうやって書いたらよいのか見当もつかないし、誰もそのことについて教えてくれない。大学受験の小論文と何が違うのか」などという苦情が繰り返し寄せられている現実をどう受け止めればよいのだろう。

話は脱線するが、そもそも教養教育を本気でやろうと思うなら、専門分野についてまったく予備知識のない高校生に対して学部を選択させ、入学した後で学部共通の教養教育をやるというのは本末転倒ではないだろうか。これは学生募集に自信の持てない大学あるいは学部のエゴではないのか。本気で教養教育をやりたいと思うなら、文系・理系くらいの大括りで募集し、教養教育や基礎教育を受けた後で、希望する学部を決定できる仕組みにすべきなのである。そうでなければ教養教育の意味がない。現在の大学入試の仕組みにはそれこそ教養が感じられないのである。

学生のことを問う以前に、教壇に立つ側の大学教員に本当に幅広い学識・教養が備わっているだろうか。教員は、自分の専門分野から少し離れて、社会問題全般や科学の未来について大学生に理解できる言葉で語れるだろうか。あるいは自分が不十分であることを恥ずかしいと感じているだろうか（私自身にも問いたい）。大学職員は、書類作成と予算管理と手続き論にしか関心がなく（特に国公立大学）、大学が学生生活や教育や研究の場であることを忘れていないだろうか。保護者や新入生は、大学などというものは、門をくぐって、適当に単位を稼いで、クラブ活動を楽しんで、卒業する前に適当な資格をとれれば御の字くらいに高をくくっていないだろうか。こうした問題を扱う教育学者も、アンケート調査データの分析を繰り返すばかりで、当事者としてのアクションを怠ってきた（不思議なことに、日本の高等教育学者の多くは自分のことを大学問題の観察者あるいは批評者だと自認しており、当事者だとは思っていない）。日本の大学はこうして長い間、大学とはどういうものであるか、大学で学ぶとはどういうことなのかについて考えることを当事者たちが巧妙に避けて、互いに責任をなすりつけてきた。教員も、職員も、保護者も、不肖私を含めた教育学者も、図らずも共犯関係なのである。

新入生に自分の大学を好きにさせ、本を読む習慣をつけさせたい

そもそも、なぜ新入生にこのようなメッセージを伝える必要があるのだろうか。一つには、実質的に大学全入時代を迎えつつも、不本意入学の学生が今でも一定の割合で存在するからである。全国大学生協連合会が二〇〇八年秋に九九九九人の大学生に対して実施した『学生の消費生活に関する実態調査』によると、現在の大学が第一志望だった割合は六〇・一％となっている。その内訳は国立大学六七・二％、私立大学五〇・一％である。このことは、国立大学の三人に一人、私立大学の二人に一人が不本意入学であることを示している。東京大学の大学経営・政策研究センターが二〇〇七年に実施した『全国大学生調査』においても、全国四八二三三人の大学生のうち、現在の大学が第一志望であった割合は六〇・五％と、ほぼ同様の結果となっている。むしろ選ばなければどこかの大学に入れる時代だからこそ、希望する大学に入れなかった場合の不本意感はかつてよりもいっそう大きいのではないだろうか。

そうした学生を見抜くには新入生一人一人の表情を見るといい。失意がありありとみてとれる、うつろな表情の学生がかなり混じっているはずだ。不本意入学者は一部の学生ではなく、大学によっては下手をすると新入生の半分以上が該当するかもしれない。初年次教育研究の成果によると、最初の半年間で大学側が何らかの働きかけをしないと、彼らは大学生活に不適応を起こしたり、不登校ひいては退学してしまう可能性があるという。せっかく縁あって入学したのだから、自分の大学を好きになれる方がいいに決まっている。大学は不本意入学者に対して、氷のような彼らの心を解凍し、励まし、正面から語りかけなければならない。

厳しい経済情勢を反映してか、大学生はますます本を買わなくなっている。上記の大学生協調査によると、一日の平均読書時間はわずか二九・二分であり、しかも長期低落傾向にある。これは、大学生の収入減と無関係ではないだろう。自宅外学生（下宿生＋寮生）が保護者から受け取る毎月の仕送り額は、九六年の九八七七〇円をピークに二〇〇八年には七五三〇〇円まで減少している。これを補うアルバイト収入も景気の低迷によって頭打ちであり、結果的に大学生は住居費を除くほとんどすべての支出（食費や携帯電話代も含む）を切り詰めているのが現実である。

私自身の経験で恐縮だが、数年前の新入生に「これまの人生で最も影響を受けた本」を持ってこさせたところ、男子学生の大部分が持参したのはマンガであった。マンガは偉大な文化だと思うが、マンガしか読まない学生には活字の文章を読む習慣がついていない可能性がある。活字を読んでいないということは、文章として世間に通用する日本語を書けないということにつながる。十分なインプットがなければ優れたアウトプットは期待できないからだ。少なからぬ大学生は、活字の本はおろか、マンガを買う金すら切り詰めているので、「読む」という習慣自体が身につかない。この「貧すれば鈍す」という悪循環を断ち切るためには、大学は図書館にさまざまなサービス機能があることを学生に紹介するなどして、彼らの読書意欲を刺激する必要がある。そして、なぜ本を読むことが人生にとって重要なのかを、誰かがきちんと語らねばならない。

正直に申し上げて、大学教育を取り巻くこうしたさまざまな矛盾と不条理こそが、『学びのティップス』を書きたいと思い立った原動力である。本書で伝えたいメッセージは三点である。第一は、せっかく大学に入ったのなら、大学で学ぶことにどういう意味があるかを考えてみよう。第二は、大学で学ぶ上でどのような具体的工夫が必要なのかを知ろう。第三に、大学で求められる学習習慣（自分の頭で考える習慣をつける）をどのようにしたら身につけられるかについて考えてみよう、である。本書はもともと名古屋大学高等教育研究センターが二〇〇六年に制作し、毎年改訂を続けてきた『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』をベースとして、スタッフの了解を得て私が大幅に加筆・修正を加えたものである。新入生に向けて書いた内容であるが、実際には、「そう言う自分は大学教員としてどうなのか」「学生に要求するばかりでなく、大学側はどうなのか」と、自問自答しながら書いた。もし本書に関心を持ってくださったなら、ご笑覧頂き、忌憚のないご感想をお聞かせ頂ければ幸いである。

参考文献

全国大学生活協同組合連合会『CAMPUS LIFE DATA 2008　第44回 学生の消費生活に関する実態調査』、二〇〇九年三月。
近田政博『学びのティップス　大学で鍛える思考法』玉川大学出版部、二〇〇九年一一月。
東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター『全国大学生調査　第1次報告書』、二〇〇八年五月。